

沖縄から教育を問う

民研オンライン全国交流集会

民主教育研究所（民研、梅原利夫代表運営委員）の第29回全国教育研究交流集会が28日、「子育てと教育に『命（ぬち）どう宝』を根づかせる」をテーマに、オンラインで沖縄と全国を結んで始まりました。

沖縄県民間教育研究所、沖縄県民間教育研究団体連絡会との共催

で、百数十人が参加。「沖縄から日本の教育をとらえ直そう」と語り合いました。

集会では琉球大学の人間陽子さんが、沖縄の若い女性たちの置かれている状況について報告しました。

埼玉大学の安藤聡彦さんは、原発や軍事関連施設が集中する青森県の下北半島や、沖縄

県の西表島を訪ねて、現地の子どもや教師、地域の人たちと交流したことについて話しました。

沖縄県の小学校教師は、「学校のまなざし」ではなく「生活のまなざし」を子どもに向けてることが学校にも日本の社会にも必要だと語りました。

大東文化大学の中村清二さんは、コロナ禍のもと、突然の休校による混乱の中にあつた子どもをどう受け止めることが「学習」「学力」を考えるうえでも重要だと提起。「学力」を「学力テスト」に収めんとすることをやめさせたいと語りました。

コロナ禍子の成長見守る

民研全国交流集会閉会

沖縄と全国をオンラインで結んで開かれていた民主教育研究所（民研）の第29回全国教育研究交流集会（沖縄県民間教育研究所などが共催）は29日、七つの分科会での討論を行い、閉会しました。「子ども・青年の育ちと主権者教育」の分科会では、保育所や小学校での実践が報告され、参加者はコロナ禍の中の子どもの姿をもとに議論を深めました。

沖縄県の保育士2人は、コロナ禍によって、いかにゆとりのない保育をしてきたかに気づかされたとし、「大丈夫だよ」といえる優しさや共感を大切するためにも、保育士の不足の解消などが必要とのべました。子どもが葛藤（かっとう）しながら成長する様子を見守り、その姿を保護者にも伝えていくと語りました。

兵庫県の小学校教師・

分科会で実践報告・討論

大江未知さんは、親の失業などコロナ禍が子どもに与えている影響にも触れつつ、詩の授業を通して子どもたちが自分の思いを出し合い、考え合って成長していったことを紹介。コロナ禍の中で、子どもへの理解を基盤にしながら教育課程を考えることなどを学んだと話しました。

子どもの主体性を大事にして「待つ」ことの大切さなどが話し合われました。政府が進めようとしているGIGA（ギガ）スクール構想の問題も議論されました。